

宇都宮の地酒で元気になろう!

「おいしい」というお客様の笑顔のために、がんばっています

東日本大震災で、市内の蔵元は大きな影響を受けました。地酒文化を支援し、宇都宮に元気を取り戻すため、6月から「地酒応援キャンペーン」がスタート。そこで今回はキャンペーンの紹介と、蔵元の酒造りにかける想いをご紹介します。



このお祭りでは地酒を多く取り扱っています



地酒で元気な宇都宮



宇都宮のお酒で、愉快になろう!

6月24日(金)、午後6時45分。宇都宮市の東武宇都宮百貨店9階にあるビヤガーデンで、「宇都宮地酒応援キャンペーン」のキックオフイベントが開催されました。

東日本大震災で、宇都宮市内の蔵元もさまざまな被害を被りました。今や全国区になつたと言っても過言ではない「とちぎ」「うつのみや」の地酒を応援するために、宇都宮市や市が協力して呼びかけたキャンペーンの初日イベントでした。

主催は市内に本社を置く靴井上清吉商店(「洋楽」)、宇都宮酒造(「四季桜」)、海外他荘五郎商店(「東郷」)、神虎屋本店(「菊」)の4蔵元。市や市所、観光コンベンション協会など行政や団体、企業が協賛し、まさに「オール宇都宮」体制のキャンペーンとなつています。

キャンペーン期間は6月24日(金)から12月31日(土)と、約半年間の長期スケジュールです。その間に、東武宇都宮百貨店ビヤガーデンや宮カフェ、みまんちゅく軒、まらろせ、屋台横丁など、さまざまな飲食店で応援活動が行われる他、市内酒店や商業施設においてPR販売を行っています。

栃本酒造組合では、平成11年にアンテナショップ「栃本の酒造 酒々楽」をオープン、地酒の宣伝に力を入れていますが、それ以外にも数年ぶり「ささらガーデン」という地酒宣伝イベントを行っています。今年7月8日(金)にオリオンスタジアムで開催され、ここでもキャンペーン販促が行われ、注目を集めました。



宇都宮地酒蔵元協会の代表者

そこで蔵元の皆さんは、さまざまな対応をされて、少しでも多くの人に飲んでもらえるお酒作りを行っているわけですが、酒そのものの工夫だけでなく、例えば飲み方として、ウイスキーにおけるチェイサーのような役割の「相水」という提案なども行っているようです。

「お酒をお水といっしょに飲んでいただくことで、日本酒の高い度数を和らげ、おいしく楽しく味わっていただきたいという気持ちです」(菊地社長)

地酒の酒、という点もグラスの側面です。「うちが基本的に県内出荷が中心ですが、地元の方に愛していただけたらいいから、醸しません。だからこそ原料にもこだわって、もちろん山田錦なども使いますが、できるだけ地元の蔵元に米を作っていたり、それを購入しています」

「おいしいながら見せてくださった銘柄のラベルには、農家の名前が印刷されていました。農家の方に誇りを持ってお米を作っていたら、それを地酒にすること、地酒のお酒として胸を張って出荷する事ができる。そんな、菊地社長の自信が伝わってくる瞬間でした。」



キャンペーンの一環として開催された、宇都宮の地酒の展示

さらに、8月1日(月)からは屋台横丁で、1屋台1種類の酒を取扱うキャンペーンを実施。9月22日(木)〜25日(日)には「新宿駅西口フェア」の宇都宮ブースで地酒を販売するなど、首都圏での販促も行っていきます。

「宇都宮の地酒を飲んで愉快になろう」のキックオフイベントで展開される、このキャンペーンが、市内蔵元だけでなく、宇都宮の消費・産業活性化の起爆剤になることが、各方面から期待されています。

地域に愛される酒造りをめざして

「日本酒離れ、と言われていますが、どのくらい減っていると思いますか?」取材でうかがった、宇都宮酒造の菊地正幸社長から、逆に質問されました。答えられずにいると、実は「と身体を乗り出して」最盛期の、約3分の1まで落ち込んでいる。

蔵元同士のつながりで、さまざまな活動

「当時は、とにかく地域の地酒を置いていただけの酒販店・飲食店がまだまだ少なく、知名度アップにこの蔵元も苦戦していました。それで「県内の地酒を全部置いてあり、販売促進に役立つ場所を作ろう」という意見が、酒造組合の若手を中心に出て来て、平成11年の12月に生まれたんです」

「もともと、栃本酒造は酒造メーカー同士のつながりが強いんですよ。だから、いろいろなかことが共同でやっていた、という側面もあります。それが近年は特に強くなってきていますね。特に若手の活動には、目をみはるものがあります」

「そう笑顔で話す外他荘社長ですが、もちろん若手だけでなく、それを支えるベテランがあればこそ、さまざまな活動を行うことがあられるんです。」



宇都宮地酒蔵元協会の代表者



キックオフイベントで地酒文化を支援し、宇都宮に元気を取り戻すための「地酒応援キャンペーン」のキックオフイベント

「最近では、アルコール度数の低いお酒が好まれる傾向にあり、いつの間にか日本酒は、お酒の中でも度数が高い方になっていまして。これも、日本酒離れの一因かも知れません」

「最近では、アルコール度数の低いお酒が好まれる傾向にあり、いつの間にか日本酒は、お酒の中でも度数が高い方になっていまして。これも、日本酒離れの一因かも知れません」



宇都宮地酒蔵元協会の代表者

「私が大学をでて数年後、長い間来てくれたのは杜氏のほとんどは新潟が若手から来るのが当然の時代、杜氏不在で酒造りをするなど考えられませんでしたから、悩みも深かったようです。それを断ち切るように決断し、蔵人たちと酒造りを始める」とともに、酒造組合などの組織を活用して、井上専務はスタッフの交流を県内の蔵元に呼びかけました。



ベテランと若手の交流から 下野杜氏誕生

多くの伝統技術産業と同様、酒造りの世界も、技術革新や技術者の高齢化などの問題を抱えています。栃木県の蔵元は、主に越後杜氏（新潟県）と南部杜氏（岩手県）という2大杜氏集団から、杜氏を育てて酒造りを行ってきましたが、後継者問題などが出て来ているのが現状です。杜氏がいなくなることで、酒造りができなくなるようでは、困る——そう考えた有志が酒造組合に働きかけて、人材交流を始めたのです。

「世代を超えた技術継承のために、蔵の壁を取り払い、杜氏の持つ技術を若い人に——そう考えて始めた交流でしたが、おもしろい事に、古い世代であるはずの杜氏たちからも、歓迎していただきました」（井上専務）

3・11 苦しみから 新しい酒造りへ

お酒造りは10月中旬頃から始まり、1月～2月中旬頃がピークです。3月には、そろそろ出荷準備に取りかかります。最後の追い込みに追われていた3月11日、東日本大震災が発生しました。

今回登場していたいた4つの蔵元でも、人の被害こそ無かったものの、さまざまな影響を受けました。

「聖なども被害を受けましたが、いちばん大きかったのは、お酒ですね。大量の酒がこぼれてしまいました。機械類もずれたりして、ようやく最近修理が終わったところなんです」（虎屋本店・松井社長）

「私どもは幸い機械や建物の被害はなかったのですが、タンクに入っていた酒蔵直前の酒がこぼれてしまいました。5600リットルほど出てしまい、大きな損害です」（宇都宮酒造・菊池社長）

「ただ、うちなどはむしろ間接的な被害

造りをしているのか」に興味があり、自分から訪問してまで交流を進めてくれたのです。こうしたことがきっかけとなり、栃木の酒造り技術はどんどん高くなり、平成18（2006）年には「下野杜氏」制度もスタートしました。

先輩の味を守りつつ、 いつかは自分の味を

「うちも、それまで来ていた越後杜氏が来られなくなり、頼んだ末に、彼に託したんですよ」（栃屋本店の松井保夫社長は、三十代半ばの青年を紹介してくれました。虎屋本店では、長い間越後杜氏に育てられていましたが、3年前に高齢を理由に引退されてしまいました。松井社長はいろいろ悩んだ末に、若手を育成して杜氏をまかせる事を決意しました。



栃屋本店 松井 保夫社長



若手杜氏 大嶋 寛

「2年前に杜氏にならばかなりの天満屋惣さんは「まだまだ無我夢中で」と頭をかきませんが、今年5月には平成22酒造年度全国新酒造り評議会で金賞を受賞するなど、早くも頭角を表しつつあります。」「一般の会社と同じで、人材の苦労は大変です」という松井社長ですが、「以前の杜氏を育てる」という決断は、成功だったようです。もつとも、天満屋さんにとつては、身も細るような2年間だったようです。「いくら数年指導を受けていたといつても、やはり自分以上に上になって、さまざまなことを決め、指示を出していかなくてはならないので、大変です。チームワークで乗り切っています。それから、他の蔵元の先輩たちに大変助けていただいています。さうくばらんに、技術者同士の交流ができるので、それだけでも大きな違いです。今はまだ、先代の杜氏さんの味を受け継いで作っていく事が精一杯ですが、将来はもっと自分の味を出していきたいですね。お米本来の味を引き出す事ができる、コクのあるお酒を造りたいと思つて、がんばっています。」

「大きいでしょう。そういつた懸念を振り払うように、井上専務が笑顔を見せます。

「私たちは、みんなに笑顔になつてほしいから、おいしいお酒を造っているんです。だから、私たち自身が、まず笑顔にならなくちゃいけないですよ。皆さんの支援に応えるためにも、もっとおいしいお酒を造りたいと思つています。」

菊池社長も、「今回のお話をいただいた時に「蔵元のファンがこうして支えてくださるんだ、ありがたいな」と、しみじみ感じました。震災後に心配してご連絡くださった方、励ましてくださった方も、たくさんおられます。地酒を造っていることの嬉しさ、ありがたさを、こんなに肌で感じたことはありません」とうなずきます。

外池社長は「こんな時だからこそ、よりいっそう真心を込めて、一生懸命酒造りをしていかなくては、若い人たちのような新しい発想、企画はなかなか難しいですが、地域の方に愛していただいている味を、さらに深くしていきたいですね」と静かに話してくれました。

松井社長も「若い杜氏ががんばつて、新しい伝統を生み出しています。この業界は、いまは小売店がどんどん減少しているのも、大きな問題ですが、何とか乗り越えて、おいしい酒を提供していきたいですね」と話します。

こうした蔵元の想いを乗せて展開する、今回のキャンペーン。お酒を買う時、飲む時に、できれば少し思い出して、味わっていただけると思います。



東北の酒蔵に
被災者の想いを
込めて

宮市内や栃木県内だつて、かなりの被害があるんです。そういうところはなかなか報道されないの、一般の方には分かりにくいのだと思います」（井上専務）

「被災被害」といって、東北に目が行ってしまいますけれども、宇都宮市内や栃木県内だつて、かなりの被害があるんです。そういうところはなかなか報道されないの、一般の方には分かりにくいのだと思います」（井上専務）

蔵元のご紹介

<p>虎屋本店 TEL: 028-622-8223 http://www.tochiya.co.jp</p>	<p>吟醸酒 極 五野蔵酒 中々蔵</p>	<p>栃外池庄五郎商店 TEL: 028-661-3084 028-661-3084</p>	<p>四季桜 四季桜 大中蔵 特別純米酒</p>	<p>宇都宮酒造株式会社 TEL: 028-661-4880 028-661-4880 http://www.utsukiyakura.co.jp</p>	<p>山梨蔵元 大中蔵 山梨蔵元</p>	<p>井上清吉商店 TEL: 028-673-2300 028-673-2300 http://www.shimizu.co.jp</p>
--	-----------------------------------	--	--------------------------------------	---	------------------------------	---